

山田 守

Mamoru Yamada



1920年、停滞していた建築界に「我々は起つ…」と宣言文を突き付けた。

分離派建築会である。同級生数人と建築の芸術性を論じ、

その必要性を主張する熱い想いが建築界を揺さぶったことは、歴史が証明している。

卒業後は日本の建築界をリードする存在だった通信省営繕課で活躍。

分離派建築の金字塔ともいえる「東京中央電信局」を設計した。しかし、海外視察で近代主義の潮流であるインターナショナルスタイルを目の当たりにし、

徐々に変貌していく。合理主義に目覚めたのだ。

帰国後は近代合理主義と自由曲線との融合を目指す作風にシフトする。

山田の「美」は、緻密なディテールを追求のではなく、巨視的なのだ。

大批判が起きた「京都タワービル」や「日本武道館」も、

山田にとっては憚ることなく、機能性に基づいた美の追求だったのである。

終生、一貫して建築の芸術性を追求し、つくり続けた

もう一つの山田守の姿がここにある。

ストリームラインの系譜

岩岡竜夫

TATSUO IMAOKA

いわおか・たつお—建築家・東海大学 教授/1960年生まれ。1983年、武蔵野美術大学建築学科卒業。1990年、東京工業大学大学院博士課程修了（工学博士）。1995年、東海大学工学部建築学科助教授。2003年、同大学情報デザイン工学部建築デザイン学科教授、現在に至る。

主な作品：立体土間の家（1998）、T平面の家（1999）、アビタ戸祭（2000）、八丁堀のローハウス（2001）、台形面の家（2003）など。

主な著書：『図 建築表現の手法』（共著、東海大学出版会 2000）、『図2 建築模型の表現』（同 2000）、『図3 建築の図形表現』（同 2001）、『街角のちいさいおうち』（東海大学出版会 2004）、『建築家山田守作品集』建築家山田守展実行委員会編（責任編集、東海大学出版会 2006）など。

【*1】分離派建築会
1920年に結成された建築デザイン運動グループ。過去の建築様式から分離し、新たな建築造形を目指すことから名付けられた。当時、東京帝大建築学科の学生であった石本喜久治（1894～1963）、瀧澤真弓（1896～1983）、堀口捨己（1895～1984）、森田慶一（1895～1983）、矢田茂（1896～1958）、山田守の6名によって結成された。1920年から28年までに、7回の展覧会と3冊の作品集を残している。後に戴田周忠、大内秀一郎、山口文象らが加わった
【*2】『あすのすまゐ』山田守著（皇國青年教育協会 1943）
主に日本の住まいに関する歴史と将来について述べたもので、「すまゐのうつりかわり」、「にっぽんのすまゐのすくたところ」、「科学的なすまゐとすまゐ方」の全3章からなる

【*3】業師寺厚（1913～98）は『山田守建築作品集』（山田守建築作品集刊行会編、東海大学出版会 1967）で作品の変遷を3期に分けているが、ここではその第3期を更に2つに分けることで、特に50年代の作品の位置づけを試みた

4つのディケード

山田守は明治27年（1894）4月、岐阜県羽島郡（現・羽島市）の豪農に生まれ、昭和41年（1966）6月、東京・五反田の関東通信病院にて72歳で逝去した。義理人情に厚く、俳句と酒をこよなく愛した人物だった。山田守といえば、「京都タワービル」（1964）や「聖橋」（1927）など、曲線を用いた個性的なデザインが特徴である。あるいは、既に取り壊された「東京通信病院」（1937）や「東京厚生年金病院」（1953）、「東京中央電信局」（1925）などを思い起こすかもしれない。それぞれ個別に印象深い作品であるが、一方で建築家としての経歴や作品の変遷などについてはあまり知られていない。そこで、分離派建築会【*1】からスタートして、「日本武道館」（1964）や京都タワービルの酷評にまみれて人生のゴールを迎えるまでの約50年間の系譜を、ここでは以下の時期に分けてまとめてみたい。それらは、戦中～戦後期（1940年代）を挟んで、ほぼ4つのディケード（10年期）でくくることができる。

第1期（1920年代）は、東京帝国大学卒業後、通信省の営繕技師として建築設計の実務経験を積み始めた時期で、日本全国の電話局や郵便局の設計に携わるとともに、関東大震災復興のための嘱託技師として橋梁のデザインも手掛けた。一方で、分離派建築会の中心メンバーとしてその結成から展覧会の開催、会誌の発行などの活動に参加している。

第2期（1930年代）は、昭和5年（1930）に海外建築視察から帰国し、再び通信省で電話局、郵便局、貯金局などの設計に従事するとともに、東京通信病院の設計責任者として病院建築を初めて手掛けた時期である。一方で個人住宅も設計している。海外視察以後、山田のデザインは表現主義的な傾向から機能主義的なデザインへと変貌していく。

1940年代の山田は、大戦の影響で建築作品をほとんど残していない。「国防電話局」（1944）が通信省での唯一の仕事で、山田の生涯唯一の著作である『あすのすまゐ』【*2】もこの時期に書かれた。昭和20年（1945）に通信省を退官して通信建設工業を仲間で設立し、通信省関連の建物復興の請負事業を始めたが3年後に倒産する。

第3期（1950年代）は、東京・湯島に山田守建築事務所を開設した昭和24年（1949）から、東京・青山に自邸（「山田邸」）を建てた昭和34年（1959）までの10年間である。昭和28年（1953）の東京厚生年金病院の設計を皮切りに、厚生省、防衛庁、社会保険庁、

東京都水道局などの公共施設を数多く設計している。また、通信省時代からの親友である松前重義が創設した東海大学の諸施設の設計や大学教育にも携わる。

第4期（1960年代）【*3】は、官庁施設や病院建築などの設計に加えて、自邸の一部をアトリエとして使用し、日本武道館、京都タワービル、東海大学湘南キャンパス、といった大きな設計を同時に行っていた時期である。仕事が一段落した昭和40年（1965）、更なる新プロジェクトのために2度目の海外視察に出向いたが、途中で体調を崩してその翌年、逝去する。

1920年代 分離派建築会と官僚建築家

分離派建築会とは、大正9年（1920）に東京帝大建築学科の学生6名が卒業直前に結成したグループである。彼らは、当時の大学教育で主流であった構造合理主義に一辺倒な建築観に異を唱え、より自由な造形表現に価値を見い出すべく立ち上がった同志であった。その中心であった山田は、堀口捨己とよく芸術論を戦わせていたという。山田の卒業設計は、ドーム天井を持つ巨大なコンベンションホールと、多面体の屋根を載せたスカイトワーのコンプレックスであるが、そのおおらかで迫力あるデザインに以後の山田建築の原点がうかがえる。

卒業後、山田は通信省に入り、岩元禄【*4】や吉田鉄郎【*5】といった先輩らと同様、いわゆる通信建築家としてのキャリアを積み始める。分離派建築の代表作品とされている東京・大手町の東京中央電信局は、山田が31歳の時の仕事である。特に設備計画上の合理性に対する設計者の説得術と、上司の器量とによって、パラボラアーチをリズムカルに並べた個性的なデザインが実現した。

この時期に山田は他の通信建築も数多く手掛けるが、それらで現存する建物はごくわずかになりつつある。オリジナルの外観をとどめている「千住郵便局電話事務室」（1929）では、横方向にスクラッチされたタイルの重厚感と、そのテクスチャーが壁から壁へ、壁から天井へ、そして軒裏から庇の小端まで途切れることなく連続するという、山田好みの手法を見ることができる。

このように、山田の建築家としてのスタートは、官庁の営繕組織の中で育まれたのであるが、そこで設計した公共施設のデザインに自らの思想と個性を重ねることで、それらを自らの建築作品として世に問うものであった。

1930年代 機能美との出会い

昭和4年（1929）8月、山田は通信省から10ヵ月間の海外視察を任命される。門司港からマルセイユまで約1ヵ月の船旅で、そこからは陸路で移動し、ベルリンを拠点に多くの現代建築（特に集合住宅と郵便局建築など）を視察し、また第2回CIAM【*6】に参加して多くの建築家とも出会っている。その後、アメリカに渡り、太平洋を横断して帰国する。

海外視察の様子は、山田が家族らに宛てた手紙【*7】や、帰国後の報告書である「生活最小限の住居」【*8】などに詳細に記されているとともに、16mmカメラで自身が撮影した動画として残っている【*9】。山田にとって衝撃的だったのは、建築家のE.メンデルゾーン【*10】が既に表現主義から合理主義へと転換していたこと、パウハウス【*11】やCIAMを中心とする国際様式が全盛だったこと、そして高速船ブレーメン号の機能美に出会ったことなどであった。

欧米のモダンムーブメントに大いに感化されて帰国した山田は、「鶴見邸」（1931）の設計の中で、日本の住まいにおける快適性や機能性への自身の思いをストレートに表現している。コンクリート造の住宅の欠点を解消し、温熱、防湿、採光、通風などをどのように確保するべきかという環境工学的な視点が、この住宅のテーマであった。

東京・飯田橋に昭和12年（1937）に建設された東京通信病院は、これまでの病院建築のイメージを払拭した明るく合理的なブロックプランからなり、斜路を使った補助動線、埃だまりを回避するための隅部のアール処理など、機能的で清潔感あふれるディテールが徹底されていた。しかし、一方で山田独特の造形表現をそこに見い出すこともできる。例えば建物の外皮を覆い尽くす50mm角の白タイルは、シームレスに連続しながら微妙な乱反射によって爬虫類のウロコのようなヌルヌルした質感を漂わせていたという。こうした表現は、千住郵便局や京都タワービルの壁面などにも共通している。



東京中央電信局（1925）通信建築史上、パイプ的存在の建物。流水防火装置の設置、気送管システムの導入、外壁柱を空調ダクトとして兼用するなど、当時としては超ハイテク建築であった（NTT建築総合研究所蔵）



千住郵便局電話事務室（1929）通信省時代で現存する数少ない山田作品のひとつ。角地のコーナーの位置にアールのついたエントランスを設けるスタイルは、その後の特定郵便局のプロトタイプともいえる。2階の縦長窓を水平連続に見せる表現には、アムステルダム派の影響がうかがえる。トンネル状のサービス通路内のスクラッチタイルの壁面は、中庭側に付けられた庇の軒先まで途切れることなく連続している

【*4】岩元 禄（1893～1922）
1918年、東京帝大卒業後、通信省入省。代表作は「京都西陣電話局」（1921）。1921年1月、東京帝大助教授（建築意匠論）に就任するも秋に結核を発病、療養生活に入り、翌年死去した
【*5】吉田鉄郎（1894～1956）
富山県出身。1919年、東京帝大卒業後、通信省入省。初期はドイツ表現主義や北欧建築の影響を受けるが、後にモダニズム建築の傑作を生み出した。代表作は、「東京中央郵便局」（1931）、「大阪中央郵便局」（1939）。著書に『Japanische Architektur（邦題：日本の建築）』（ワスムート社（ドイツ） 1952）、「スウェーデンの建築家」（彰国社 1957）など
【*6】CIAM（Congrés Internationaux d'Architecture Moderne：近代建築国際会議）
建築をアカデミズムから脱却させ、個々の力では対処し難い共通の都市問題を検討することに始まった国際的連絡機関。1928年、W.グロピウス、ミース、ル・コルビュジエら24人の建築家たちがスイスに集まり、第1回会議が開かれた。以後、第10回（1956）まで存続。ちなみに第2回のテーマは「最小限住居」
【*7】『建築家 山田守の手紙 1920・1930』（向井覺編、山田守建築事務所 1982）に所収。なお、向井覺氏は2008年3月13日に逝去した（享年86歳）。心よりご冥福をお祈りいたします
【*8】山田守「論説 生活最小限の住居」『建築雑誌』1931.4（1930年7月の講演をまとめたもの）
【*9】全3巻の内容は、第1巻：現代建築に関する記録、第2巻：過去の建築に関する記録、第3巻：アメリカの建築に関する記録。山田が出会った当時の建築家や建築作品の様子を撮影した第1巻が現在行方不明
【*10】エーリッヒ・メンデルゾーン（1887～1953）
ドイツ出身のユダヤ系建築家。1920年代の表現主義を代表する建築家で、後に直線的な新即物主義に移行する。代表作は「アインシュタイン塔」（1924）
【*11】パウハウス
（『INAX REPORT』No.171、p.6参照）



上—東京通信病院（1937）民間企業と通信省職員の寄付金によって、通信省が自前で建てた大病院。規格サイズの建物棟を平行配置しクラスター状につなげることで、均質かつ十分な採光と通風が確保され、増築に対しても容易に可能なシステムとなっている
下—東京厚生年金病院（1953）Y字の中央部に垂直動線やコモンスペースなどを集約し、翼部に各病室を設けることで、集中管理方式を採用している。また逆梁スラブを採用することで、バルコニー側の開口部を天井いっぱいまで設けているなど、構造上の工夫がされている
（写真2点とも：東海大学学術資料センター所蔵）



京都タワービル（1964）高さ31mの鉄骨鉄筋コンクリート造のビルの上に、高さ100mの鉄板構造（=応力外被構造）のタワー（法令上は屋上工作物）が載った建物。ビル部とタワー部の接合部分には、8本の鉄骨柱が使われている。タワーは設計構想の途中、施主の要請で付け加えられた。竣工当初、ビル部の外壁を覆うバルコニー庇の軒裏には、23mm角の紫色の泰山タイルが張られていた（写真下：大阪山田守建築事務所所蔵）

【*12】京都景観論争
京都在住の外国人たちにより抗議が表面化、国内でも谷崎潤一郎や川端康成、丹下健三らの文化人が反対署名を寄せた。当時の反対運動を京都における「第一次景観論争」、バブル期以降の市中心部のマンション開発への市民団体の反対を「第二次景観論争」と呼んでいる。第二次論争は京都ホテルや京都駅ビルなどの建設計画が進んだ90年代初頭にピークを迎える。いずれの論争も、事業者による建築申請に対して行政側が条例を緩和し、市民がそれに反対するという構図である

1950年代 プロトタイプの創出

戦後日本の再建の中、山田の建築家としての再出発は東京厚生年金病院の設計からであった。飯田橋の都電通りに面した長方形の敷地の中に、Y字型のヴォリュームがセットされている。その形は病院としての複雑な諸条件を同時に満足するための合理的な回答の結果であった。にもかかわらず、Y字型（山田のYにも解釈できる）という単純図形は、建築の図像としての強い意味を我々に与えるのである。こうして山田は、機能と造形をひとつの単純な形態の中に重ねる表現方法、すなわちプロトタイプという手法を自ら確立したものである。これにより彼の美学は、東京中央電信局や東京通信病院の造形美から脱皮し、様式という呪縛から解放されることになる。

プロトタイプとして創出されたモチーフは、さまざまな環境、そしてさまざまな用途の建物に対して汎用される。東京厚生年金病院の中央部の螺旋状スロープもこうしたプロトタイプの一つであり、そのモチーフは「東海大学代々木校舎2号館（X棟）」（1958）にも応用されている。山田は東海大学の創設に深くかかわっているが、それは通信省時代に同胞であった松前重義との関係によるものである。東海大学の前身である「航空科学専門学校」（駒越校舎、1943）から「湘南校舎3号館」（1966）などに至るまで、ほとんどの校舎建築をデザインし、また建築学科主任教授として自ら教壇にも立っている。

この時期に発明したもう一つのプロトタイプといえば、「長沢浄水場」（1957）に使われたマッシュルームコラムであろう。このコラムは、上階の水槽と無梁板の薄いスラブを支えるための構造柱であるが、噴水のメタファーのようにも見える。実際に柱の中心部には雨樋が打ち込まれており、屋根の雨水を地下の貯水槽まで運んで浄水用として利用している。このモチーフは、同時期の他の建物の車寄せ用の底を支える独立柱でも多用されている。

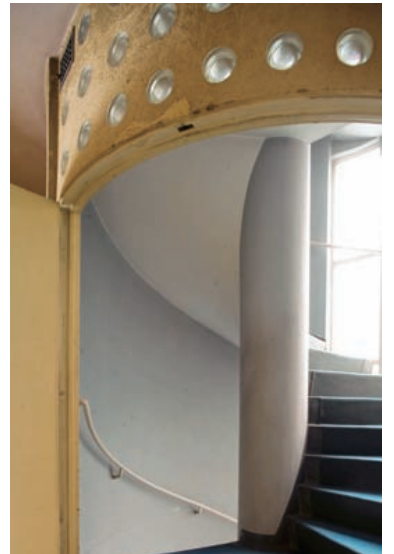
1960年代 風景としての建築造形

山田邸は、山田が65歳の時に建てた生涯最初の自邸である。当初、青山の事務所（「AOAビル」（1960））の新築現場にあった飯場^{バラック}を移築して住むようなことも考えていたらしい。家族の猛反対にあって考え方を改め、将来いろいろな用途で使われることを期待して、コンクリートラーメン構造のスケルトン住宅を設計した。階段室を2つ持つ3階建てのこの住宅は、山田ファミリーが入居してまもなく、その半分以上のスペースが山田守事務所の分室として使われることになる。

この分室では、3つのビッグプロジェクトが同時並行して進められていた。日本武道館は、東京オリンピックの武道競技会場として北の丸公園内に計画され、昭和39年（1964）10月に竣工した。京都タワービルは、そのオリンピックイヤーに合わせて開通した東海道新幹線で観光客が増加する京都の駅前再開発の目玉として計画され、鉄板構造のタワー部は昭和39年末にオープンした。東海大学湘南キャンパスは、学生増加に伴い新たに買取した40haの用地の中に、運動施設と緑を交えつつ多数の校舎を計画するもので、昭和38年（1963）に「1号館」が建設され、以後「望星学塾1号館（学生寮）」（1964）、「2号館（大講堂）」、「研究実験館A棟」（ともに1965）、3号館、「松前会館（教職員厚生施設）」、「武道館」（ともに1966）などが次々と建てられた。

この時期の山田の仕事は超多忙であったこともあり、やや大ぶりで表層的なデザインであることは否めない。山田の視線の先は、既に建築から都市へと向かっていった。北の丸公園の森に浮かぶ日本武道館の屋根、新幹線の車窓から見える京都タワービル、屋上から見る湘南キャンパスの全景、それらは時間とともに変化する風景の一部として、あるいは高速で流れていく現代都市の風景の一部として、人々のイメージの中に刻まれつつある。

日本武道館の設計者選定過程への不信感やデザインそのものに対する疑問視、京都タワービルの建設中に勃発した京都景観論争^{【*12】}、こうしたパッシングを尻目に、昭和40年10月、山田は2名の所員を引き連れて2度目の海外視察に旅立つ。アンカレッジ経由で北欧へ行き、その後、アメリカから南米ブラジルへと渡る約2ヵ月間の旅行であった。そこでは、今後の新たなプロジェクトへの準備として、幾つかの水族館や飛行場を視察している。しかし、帰国後まもなく病に倒れ、それでも未完の湘南キャンパスに何度も足を運び、病床では「設計がまずいなあ」とつぶやいていたそうである。❁（図版解説も筆者）



左—住宅の南面と“くの字型”のヴォリュームで仕切られた前庭。奥に見える3階部分は山田の書斎で、2階の縁側から直接上ることができるようになっている。自身が造園したという前庭は、小川が流れ、築山のある回遊式庭園だった
上—2階玄関ポーチから螺旋階段を見る。シリンダー状の階段室と玄関ホールの間には曲面状の両開きの鉄扉が付いていて、その上部の垂れ壁には採光用のプリズムガラスが嵌め込まれている。重たい扉の設置は、螺旋階段が公用（オフィス用）としても使用されていたことを示すものである

左下—道路側のファサード 庇として張り出したスラブの薄さがひととき目を引く。3階のベランダの手摺子は、1本の鉄筋を折り返してつくったオリジナル製品である。現在カフェとして使われている1階部分はずもととピロティで、山田は朝からそこでよくビールを飲んでいたという
下—2階の8畳和室と縁側を見る。畳の縁（へり）をよく見るとすべて1本に統一されており、欄間障子の形も含めて、山田独特のデザインへのこだわりがうかがえる

山田邸

【建築概要】
所在地：東京都港区
規模：地上3階
構造：RC造
竣工年：1959年





1階操作廊内部 2007年の大改修で内部の柱の表面はすべてホワイトに再塗装されたが、オリジナルはグレー系の艶のあるカシュー塗りであったと思われる。すべてのコラムには雨樋が打ち込まれており、詰まることなく現在まで使われている

上—操作廊の濾過池から本館を見る。列柱と開口部の繰り返しパターンによる外壁のデザイン。改修後、開口部はすべてアルミサッシュに代わり、濾過池は太陽光発電パネルでふたをされている
下—本館南面全景 マッシュルームコラムが積層・反復する単純な構成を地として、その一部を覆い尽くすようにガラスのカーテンウォールが取り付けられている。半円形の窓は、もともとパラポラの組み合わせによる扁平な曲線をしていた



上—操作廊の端部の地上階（地下1階）にある、コンクリート打放しのコラム。オリジナルの型枠の様子が残る唯一の柱で、同一形状の細長い小割り板を駆使してパラポラ（放物線）状の回転体を構成していたことが分かる
下—地下2階の倉庫内のコラム。高さ6m以上のコラムが林立する様子は、エジプトの神殿を彷彿させる。ただし、これらのコラムの型枠は化粧としてデザインされていない



長沢浄水場

【建築概要】
所在地：神奈川県川崎市多摩区三田5-1-1
規模：地下2階、地上3階
構造：RC造
竣工年：1957年



左—2号館建物中央部の円形シリンダーの外側に付けられた螺旋スロープ。翼部とシリンダー部とは構造的に分離されているため、スロープは梁やスラブを避けることなく各階を自由に貫くことができる。この構成は東京厚生年金病院と同一のものである
 下—同螺旋スロープは屋上スラブを突き抜けて、鉄塔の載る物見櫓まで連続している。シリンダーの側面は上部にいくにつれてやや外側に膨らんでいるが、遠くから眺めた時の形態を意識した結果と思われる
 右—大ケヤキのある中庭から2号館を見る。この建物はY字ではなくX字プランである。1本のマッシュルームコラムによる玄関ポーチのデザインは、当時の他の建築においても多用された



1号館北東面外観 東海大学としての最初の校舎。S字状の軒先を持つ玄関庇と屋根庇、洋梨型の断面形状をしたジャイアントオーダーが特徴

東海大学代々木校舎 1号館・2号館

【建築概要】

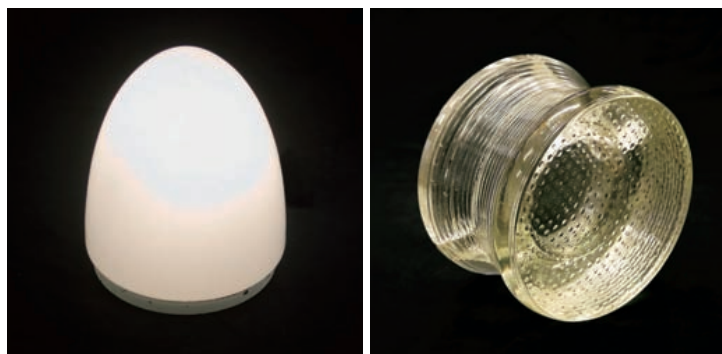
所在地：東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4

規模：1号館；地上3階、2号館；地上5階

構造：RC造

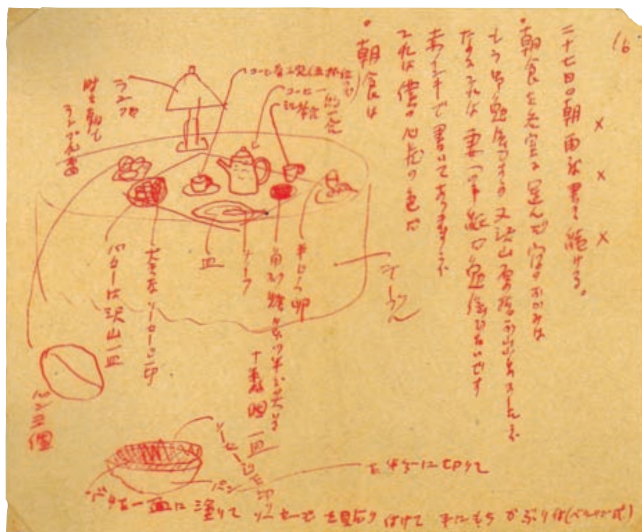
竣工年：1号館；1955年、2号館；1958年





1

2



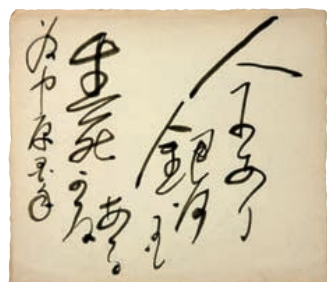
3



4



5



6



7



8

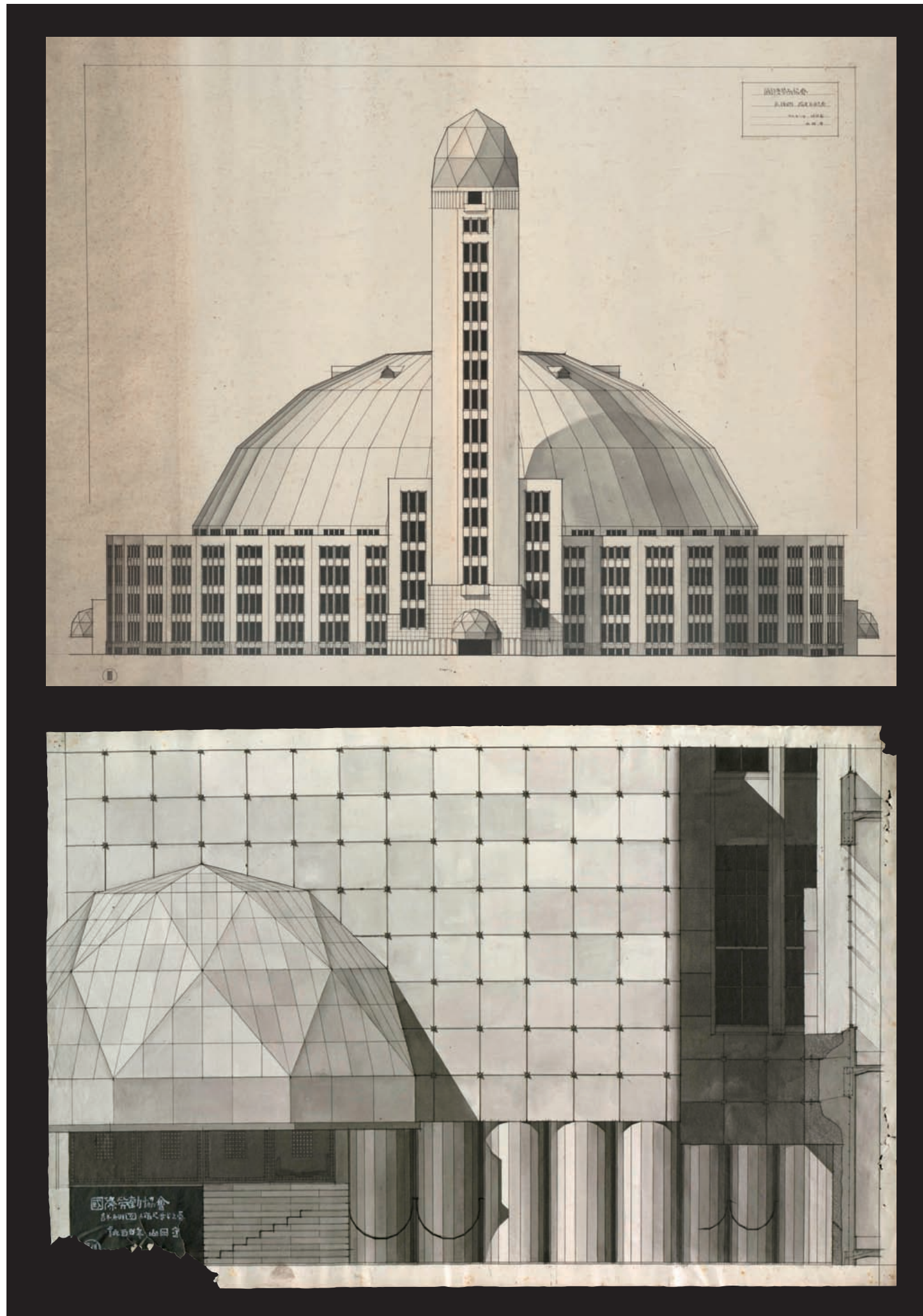


9

1 バラボラ型のランプシェード 東京通信病院で使用されていた(H=24cm)
 2 サンゴパン丸型プリズム 外壁に埋め込まれた採光用の円形ガラスブロックで、山田の多くの作品に繰り返し使われている(φ=12cm)
 3 ベルリン滞在中のアパートで書いた手紙の一部(トレーシングペーパーの上に赤インク)
 4 満鉄実習へ向かう途中の、京城(現在のソウル)の朝のスケッチ(1919)
 5 レストランで出された海老のスケッチ(赤鉛筆、1963)
 6 「人にあり銀河にもある生死かな」山田の墓の鞍馬石に刻まれている俳句
 7 「フリーデザインクレマトリウム」(1920)

8 新築中のメンデルゾーン自邸前で(1929) 左はE.メンデルゾーン、右は山田
 9 新橋の料亭「次郎」で 左から松前重義、春日野親方(元・松錦)、松光

1~2 東海大学岩岡竜夫研究室蔵
 3~6,9 山田健治郎所蔵
 7 「建築家山田守作品集」所収
 8 向井覺所蔵



卒業設計「国際労働協会」(1920) アヤソフィアを彷彿させる巨大ドーム、内側に観覧席を設けたドーナツ状の建物、多面体ドームが載る高さ約100mのタワー、それらが一体となった建築である。縮尺1/100で描かれた正面図(上)は、1.4×1.6mの大判用紙(造船学科で使われていた)にインキング仕上げ(東京大学工学部建築学科所蔵)

山田守 人と作品

1894-1966

制作：大宮司勝弘（東京家政学院大学住居学科）

略歴

- 1894年(明27) 岐阜県羽島郡上中島村字長間に生まれる
- 1917年(大6) 東京帝国大学工科大学建築学科入学
- 1919年(大8) 瀧澤眞弓、堀口捨己とともに満鉄実習。中国・青島に足を伸ばし、ドイツ新建築を見る
- 1920年(大9) 7月、石本喜久治、瀧澤、堀口、森田慶一、矢田茂らと分離派建築会を組織、第1回作品展を白木屋で行う。東京帝国大学工学部建築学科卒業。通信省営繕課に技手として就職、11月に技師となる
- 1922年(大11) 神保寿と結婚。日本建築学会特別大会で「新建築と社会」を講演
- 1924年(大13) 復興局土木部事務嘱託
- 1928年(昭3) 9月、分離派建築会第7回作品展を日本橋・三越で行う。この後、分離派建築会は自然解散
- 1929年(昭4) 8月、欧州視察。フランクフルト・アム・マインで第2回CIAMに参加
- 1930年(昭5) 4月、欧州から米国へ。5月、帰国。7月、読売新聞社講演で「生活最小限の住居」を講演。復興院橋梁課嘱託
- 1932年(昭7) 上野・松坂屋で行なわれた新興独逸建築工芸展覧会において「独逸のジードルンク」を講演
- 1933年(昭8) ブルーノ・タウトが来日し、吉田鉄郎、谷口吉郎らと建築を視察
- 1935年(昭10) 日本技術協会常務理事
- 1940年(昭15) 通信省営繕課長
- 1944年(昭19) 勲三等瑞宝章受章
- 1945年(昭20) 通信省退官。通信建設工業設立、専務取締役
- 1949年(昭24) 通信建設工業解散。山田守建築事務所を東京・湯島に開設
- 1951年(昭26) 東海大学理事、工学部建設工学科主任教授を兼務
- 1957年(昭32) 通信建築の功勞に対し前島賞受賞
- 1960年(昭35) メキシコ建築家協会外国特別委員
- 1963年(昭38) 日本武道館の設計競技に当選
- 1964年(昭39) 藍綬褒章受章。日本建築学会大会で「首都圏の政治文化を中心とする第二センターを相模平原に建設する計画案」を発表
- 1965年(昭40) 海外視察。勲三等旭日中綬章受章。日本建築学会大会で「京都の新旧都市計画」を発表
- 1966年(昭41) 逝去(72歳)

主な作品

※印は現存せず

- 1922年(大11) 東京中央電話局牛込分局(東京)*
- 1923年(大12) 下関電信局電話課局舎(現・下関市役所第一別館(閉鎖中))(山口)
- 1924年(大13) 門司郵便局電話分室(現・NTT門司電気通信レトロ館)(福岡)
- 1925年(大14) 東京中央電信局(東京)*
- 1926年(大15) 永代橋(東京)(重要文化財)
- 1927年(昭2) 聖橋(東京)、天下茶屋郵便局電話分室(現・NTT天下茶屋第1ビル)(大阪)
- 1929年(昭4) 千住郵便局電話事務室(現・NTT足立電話局)(東京)、万代橋(新潟)(重要文化財)



分離派建築会結成同時の集合写真(1920) 左から、森田、矢田、堀口、山田、瀧澤、石本(東京工業大学藤岡研究室所蔵)

- 1931年(昭6) 甲府郵便局・電話局(現・甲府市役所南庁舎)(山梨)、鶴見邸(東京)*
- 1932年(昭7) 荻窪郵便局電話事務室(現・NTT荻窪電話局)(東京)
- 1935年(昭10) 広島通信診療所(現・広島通信病院被爆資料室)(広島)
- 1936年(昭11) 熊本貯金支局(現・熊本市役所花畑町別館)(熊本)
- 1937年(昭12) 東京通信病院(東京)(通信協会賞)*、広島電話局西分局(現・NTT広島西営業所)(広島)、渡辺邸(無辺洞)(東京)
- 1943年(昭18) 航空科学専門学校駒越校舎(静岡)*
- 1944年(昭19) 東京中央電話局麹町分局(国防電話局)(東京)*
- 1953年(昭28) 東京厚生年金病院(東京)(芸術選奨)*
- 1954年(昭29) 大阪厚生年金病院(大阪)(日本建築学会賞)*
- 1955年(昭30) 東海大学代々木校舎1号館(東京)、防衛庁東京中央病院(東京)
- 1957年(昭32) 長沢浄水場(神奈川)(DOCOMOMO100選)
- 1958年(昭33) 野田市郷土博物館(千葉)、熊本通信病院(現・NTT西日本九州病院)(熊本)(DOCOMOMO100選)、東海大学代々木校舎2号館(東京)、和田堀増圧ポンプ所(東京)
- 1959年(昭34) 山田邸(現・蔦サロン、カフェ)(東京)、東海大学代々木校舎3号館(東京)
- 1960年(昭35) 社会保険横浜中央病院(神奈川)、AOAビル(東京)*、代々木増圧ポンプ所(東京)
- 1961年(昭36) 亀戸増圧ポンプ所(東京)
- 1962年(昭37) 東海大学付属相模中学校・高等学校(神奈川)、高松通信病院(現・NTT西日本高松診療所)(香川)、大和郡山市庁舎(奈良)、東海大学代々木校舎4号館(東京)
- 1963年(昭38) 東海大学付属工業高等学校(現・翔洋高等学校)(静岡)、郵政互助会ビル(現・古河千代田ビル)(東京)、東海大学湘南校舎1号館(神奈川)
- 1964年(昭39) 日本武道館(東京)、京都タワービル(京都)、東海大学湘南校舎望星学塾1号館(現・J館)(神奈川)
- 1965年(昭40) 東海大学湘南校舎2号館・研究実験館A・B・望星学塾2号館(現・K館)(神奈川)、鈴与株式会社労働福祉センター(静岡)
- 1966年(昭41) 東海大学湘南校舎3号館・研究実験館C・D・E・松前会館・武道館(神奈川)、東海大学短期大学望星学塾(熊本)

取材協力・資料・写真提供

NTT東日本 東京支店／学校法人 東海大学／東海大学岩岡電夫研究室(p.4)／東京工業大学藤岡研究室／東京大学工学部建築学科／東京都水道局長沢浄水場(表-4)／蔦サロン・山田五十一郎／渡邊一雄／『建築家山田守』向井覺著(東海大学出版会 1992)／『建築家山田守作品集』建築家山田守展実行委員会編(東海大学出版会 2006) (50首順)

【次号予告】

次号(7月20日発行)の「生き続ける建築」は松田軍平です。

*特に明記のない写真は、2008年1~2月に新規撮影したものです。